

尋常
小學

國民修身篇

貳卷

檢定合格本

K/20/
46a
Z

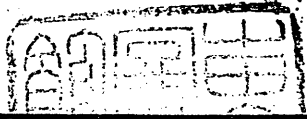
井上哲次郎校閱
赤沼金三郎編纂

尋常
小學
國民修身篇

版權所有

勅諭

一軍人は忠節と盡すと本分とすし



一軍人は禮儀と正くすし
 一軍人は武勇と尚すし
 一軍人は信義と重んずし
 一軍人は質素と旨とすし

右の五ヶ條は軍人たるもの暫も忽にすしおらすさて
 之を行はんには一の誠心とを大切なれ抑此五ヶ條は我
 軍人の精神にして一の誠心は又五ヶ條の精神をり心誠

ならざれば如何なる嘉言も善行も皆うはへの裝飾にて何の用にかは立つべき心たに誠あれば何事も成るものぞかし況してや此五ヶ條は天地の公道人倫の常經なり行ひ易く守り易し汝等軍人能く朕の訓に遵ひて此道を守り行ひ國に報ゆるの務を盡さは日本國の蒼生舉りて之を悦ひまん朕一人の懌のみならんや

明治十五年一月四日

御名

尋常 小學 國民修身篇卷二

評者

井上哲次郎 校閲

赤沼金三郎 編纂

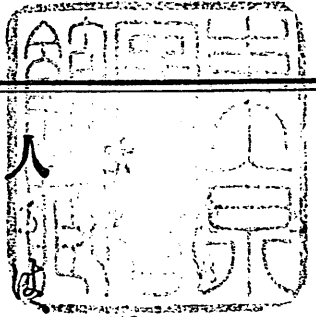
第一課

正直

正直なる心をして以て、

よろづの事を成行せむ。

正直は成就の證人なり。



正直 ならざる人とは、たとひ才能
 ありといへども、身を立つる
 ことあたはざるものなり。
 たゞ正直の一徳をたんによく
 まもりなば、たとひ才みトかし
 といへども、人に信せられて、
 何事もうちまかせらるゝもの
 なり。

正直なる人は、わが心にはづ
 ることなき故に、如何なる
 人の前にいづるとも、おそるゝ
 ことなきものなり。

第二課

森蘭丸の正直なりし話
 森蘭丸は、幼きときより、織田
 信長に仕へ、正直にして、才能

のほまれありき。

あるとき、信長

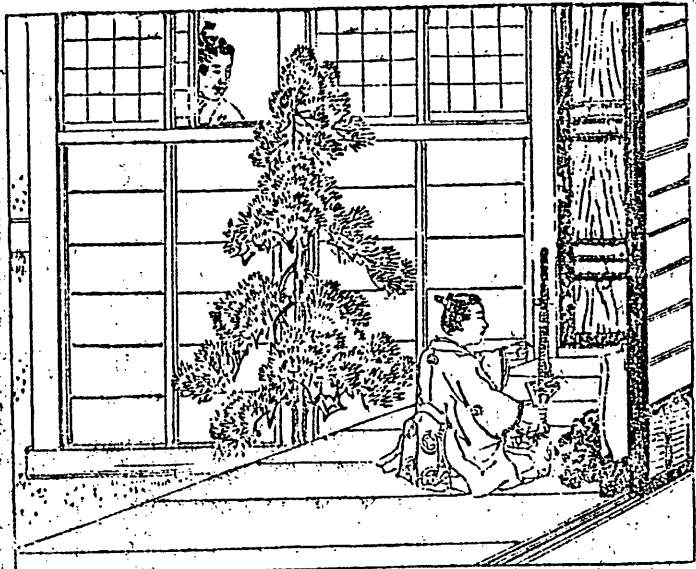
刀を所持せし

おかれしに、

さやのきざし

みめを數へ

居たり。



信長、ひそかにこれを見せ、その

人後のかたの人の集め、きざし

み鞘の數を言ひあてなんもの

に、この刀をあたふべき由

いはれければ、みなおぼはかりて

いひけるに、蘭丸は、ひとりた

まりるたり。言ひあて、言ひあて

信長、これとひけるに、蘭丸

言は、さき、に、數へて、覺へ、居れり
 ほど、いはざりければ、信長、ふかく
 るの、正直、を、賞して、其、刀、を
 蘭丸、に、あたへられけり。
 第三課
 禮儀
 人、の、萬物、に、まぐれたる、ところ
 言は、禮儀、の、道、を、たつる、に

辨あり。言ひし人の心、まされ、禮儀
 なくば、かたぢは、諸人間、なれども、
 心、は、禽獸、ひとし、さる、べし。
 禮儀、を、おこなふ、は、トめ、は、まづ
 衣服、を、しとのへ、たちる、よるまひ
 づ、つむし、み、ことば、つがひ、を、正
 しく、す、べし。
 君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友、の、と

まつはり、それく、禮儀にかまふ
 やうに、するは、すまはち、人
 の人たる道にて、禽獸にかかは
 りたるは、ところ、あり。まゝ、
 第四課、
 松平信綱の衣裳
 松平信綱は、人つねに、衣裳

氣を、ついで、出仕の
 民に、みたり、ある、衣裳、
 着ず、ぬ、人に、いひける、やう、人
 の心は、衣裳に、よりて、か
 の、なり。先づ、衣裳、より、氣
 人をつけて、恭敬、まゝ、らす、ば、
 忠勤、とも、つくしがたき、もの、なり。
 と、いはれけり、とぞ。

第五課

忠

堪忍

人と交るには、堪忍を第一と

す。堪忍しなれば、一日も世に

立つことあたはず。ゆゑに、堪忍

は無事長久の基」といへり。

兄弟のあひた、堪忍しなれば、その

たしむる必ずはまれ、朋友の

あひた、堪忍しなれば、そのま

はり必ずやぶるものなり。人

におり、悪口をせらるるものと、これ

にふことなふべからず。悪口はこ

をなまし、これにかまはざれば、

おのづからきゆるものなり。

きゆるものなり。

悪口にかまはざれば、悪人たより

ぞ 失ふものなり。たとへば、天
 に むかひて つばき すれば、か
 へりて、わが 身 に 落つるが
 如し。
 すべて、心とをば、大空の、物に
 人とはらぬやうに、もち、人の
 過とをゆるむとて、みたり。人
 とせめいかることなかれ。

何事も、心にひろくとせめぬれば、
 一切のもの、心にさはるること
 なし。心に物のさはるは、
 心のうちせまきゆゑなり。

第六課

高倉天皇の寛仁

高倉天皇は、いとけまさきときより、
 いつくしみふかきみかとなりき。

御とし十歳の御庭
 のころ、御庭
 のもみぢを
 愛したまひ、侍
 臣におほせて、
 大切に守ら
 せたまひけり。
 さる程に仕丁



等 この由を、知らず、ある日、この
 枝を折りて、酒を暖めけり。
 侍臣は、これをみて、いかなる
 罰をうけんか、と大に怒り、
 それで、つとむに、その由を
 奏しけるに、天皇少しも怒りた
 まふ色なく、しづかに
 林間、酒、焼紅葉、

と吟いふ句を吟じたまひ、少し
も人とおめたまはざりけり。

高倉の天皇の、かく堪忍したまふ
を思へば、われく臣民たるもの
は、たがひに堪忍して、みたり
に思ひがるまじきこと、ならずや。

第七課、

謹言慎行、

よろづのことは、言よりおこる
もの多し。ゆゑに、「口は禍
の門」といへり。人の言は、
人のあしきこと、せばいふた
からず。このみて、人の過を
かたり、人のまねなせして、
あざけり、わらふ人は、心の
慎み、あざき人のにて、人に

いやしめらるゝものなり。
 誰もみまどきくまどと思ふことも、
 人のみまどくことあるものなり。
 り。されば人の耳はかへに
 人つき、人の目はいたはあり
 ぬおもひ、深くつゝしむべし。
 の第八課
 劉器之の言を慎みむ事

劉器之は、行儀正しき人なり。
 一日、司馬溫公に對して生
 の間行ふべき道をたづね
 ければ、溫公、「誠と云ふもの
 器之をそれなるべきことを
 けり。
 器之、さらば「誠を以て行ふ
 何れより先に行へば、その誠

に至るを。ととひければ、みたり
なることば。といはざる。より
はしめよ。とこたへけり。

器之、妄なる語。をいはざるは、
いとやけきこととなり。たかく
として、つとめける。やいもすれば、
言いと行と。相違して、いひ
たしたる。こととく。行はざる人こと

のみ多く、七年の。後ではとめて
言と行と、一致にりなりける
とぞ。人

第九課

勉強
人は、光陰の得たぐうをなひ
やすきことと。思ひて、學業を
勉強すべし。光陰は、財寶の父

にして、勉強は幸福の母なり。
幼きとき、學問を勉めざれば、

人よはひの、かたむきぬる、の、
くゆる、とも、およびがたき、もの
なり。

身とて立て、家とてさむる、人
は、いとけなき、とき、より、學業
とてつとめて、心のたまひとて

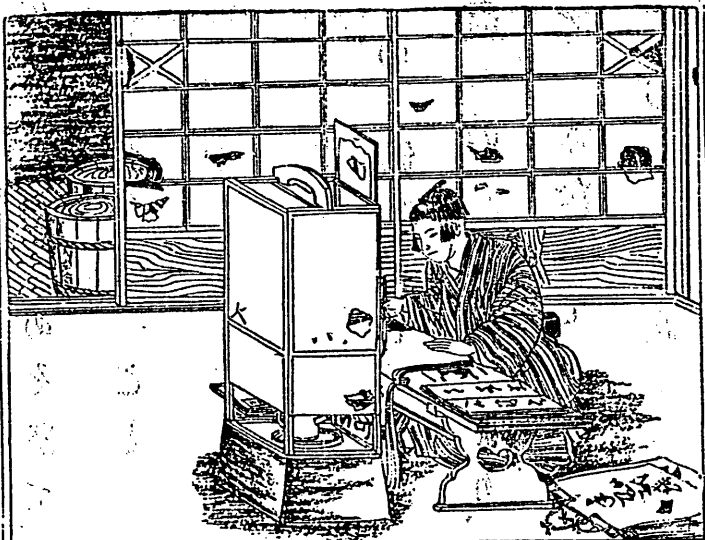
みかくべし。いたづらにあそびて、
むなしく、光陰とておくる、こと
なかれ。

第十課

新井白石の勉強せし話

新井白石は、九歳のころより、
みづから課業とてさためて、晝、
三千字、夜、一千字づゝ、習ふこと

となし、ねむけ
 をもよほし堪
 へがたきとき
 は、冷水を
 びて、ねむけを
 さまし、定めたる
 課業を全く
 せはりたる後、



と、ろよくねむりにつけりといふ。
 白石は、かくつとめて怠らざりし
 かば、遂に、名高き大學者となりけり。

第十二課

勤儉

家を保つる道は、勤と儉

とにあり。勤なれば、よく財
を得、儉なれば、よく財
失はず、二つならびて、一つ
かくむべからず。

勤儉の工夫は、勞苦にたへて、
よく家業を勤め、質素を旨
として、儉約を行ふにあり。

有用の品は、一本の筆、一枚の

紙たりとも、大切になすべし。

無益の品は、たとひ買はずとも

ともかふべからず。

第十二課

フランクリンの箴言を買

ひじ話

むかし、フランクリンといふ大賢人

ありけり。かつてその幼きとき

の...こと...と...次...の...と...く...語...
りぬ。

「余が七歳のころ、友人より、
わづかの金を借らひければ、
よろこびて小間物屋におもむき、
けるが、みちにてある友の、
笛をふきつゝ来るを見てこの
金にてこれと、かひうけけり。

「余はよろこびい
さみて家へ
かへり、これを
吹き立てける
き、兄姉など
より、笛の價
を問はれ、かつ
この金あれば、



他のよき品あまたをもとめ
 得べかりしといひてわらはれけ
 れば、自分も、つまらぬことと
 してけりと思ひて、終になき
 いたしけり。

「余は、このときより、**笛**のため
 にあまり多く費すことな
 かれ。」といふいましめをつくり、

その後、無用の品をもとめん
 と欲するときは、つねに、
 そのいましめを思ひ出して、その
金を貯へけり。

第十三課

勇氣

うはへのつよきものは、その
 中、かへりてよわきものなり。

つねのとき、このみてけんくわ
ぞする人は力をいたすべき
かんえうのときにのみて、
にぐるものなり。

まことの勇氣あるものは、つね
におちつきて、一旦大事あるに
あたりても、少しもさわぐこと
なきものなり。

かろくときうまれつきの人

には、勇氣なきものなり。

眞の勇氣は、正しき道ぞ

かりて、己の慾に克ち、不正

のそしりにたゆるにあり。

わが行、正しきときは、人に

わらはるゝとも、心にはづることなし。

よしわが行よこしまなれば、人

にほめらるゝとも、わが心に
はづるものなり。

第十四課

眞勇 ある小兒の話

ある日、あまたの小兒、學校に
ゆく途中にて、一人の小兒、
鳥のすゝとりにゆかん
と言ひいたしたりければ、一同

これにしたがひ、
学校をば、
やすみて、森の
方へとおも
むきけり。
その中に一人
の小兒あり、
これをさかす



して、「われ 今朝、父母 に 學校
に 行く と つけたれば、父母
の ゆるし を 受けねば、君 に
したがつがたし。」と いへり。

あまた の 小兒 等 これ を きいて、
臆病 なり と あざ けりたれど、
この 小兒 は、少し も 臆せず、
かたく この すゝめ を こばみて、

ひとり 學校 に おもむきたり。

教師 は、人より 此 はなし を き

いて、翌日、生徒 に 向ひて、勇氣

の こと を かたり、さて いひけるやう

「わが 務 を こたりて、むなしく

あそび たる 人 と、道ならぬ

あざけり に 臆せず、其 務 を

つくしたる 人 と、いづれ か 勇

氣ありて、いづれか臆病なる。

と問ひければ、は下め人ぞ

臆病なりとあざけりしもの

は、皆、頭ぞふし、面ぞ赤ら

めて、一言ぞもいひ得ざりし

とぞ。

第十五課

柔和

女子は、おとづかしにして、ものさわが

しからぬをよとす。多し、い

ひみたり、わらふは、みたく

きものあり。

女子は、いどけあきときより身

をへりくたり、なにごとも、柔和

にして、人をうらみいかること

なかれ。

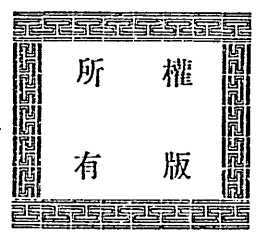
よじ人 の しむけ あしく とも、
 いまどほらずよくものびて 誠
 を つくじなば、むすほれしこと
 終 にはむとけぬまをし。より
 しんるいのの和がざる も、ともたち
 の ながむつまをからぬも、まみま
 人をいせめておのがま 身道を か
 へりみざるいよりおこるものま

り。
 人 を うやまひても その 人 まは
 禮 まき とき は、わが 敬 の い
 まだ いたらぬかと かへりみ、人
 を いつくしみても その 人 まは
 したしみの心をむくいざる
 とき は、わが いつくしみの い
 また たらぬかと かへりみよ。

かく己にかへしたづねまば人
 をとがむることまからん。

小尋國民修身篇卷二終

明治廿七年三月廿一日
 明治廿六年三月廿一日
 明治廿六年三月廿一日
 明治廿六年三月廿一日
 明治廿七年三月廿一日
 印刷版發行
 再發行
 發行



著者	發行者	發行者	發行者	發行者	印刷者	印刷所
赤沼金三郎	井上蘇吉	梅原龜七	井上弘太郎	酒井清藏	熊田活版所	熊田活版所
東京市本郷區元町二丁目五十五番地	東京市神田區錦町三丁目	大坂市東區備後町四丁目十一番地	東京市下谷區二長町三十二番地	東京市神田區表神保町五番地	東京市神田區錦町三丁目廿五番地	東京市神田區錦町三丁目廿五番地

定價金三錢五厘

尋常
小學
國民修身篇
三卷

檢定合格本

K/20/
46a
3